

福永亜希子

B：宮城県コース

2011年3月11日に発生した東日本大震災。それから既に1年以上経った。震災当時、私は関西の自宅にいたため、地震による被害は無かった。その後、震源地が福島県沖だと聞き、その地震の威力の大きさを知った。地震が発生した後、大きな津波も発生したと聞いた。その様子はテレビのニュースや新聞で何度も報道された。

私には想像ができないくらい大きな津波が町を飲み込んでいく様子をメディアを通して見ていた。

今回、立命館大学校友会東日本大震災復興支援事業「東北応援ツアー」に参加した理由は、地震後の東北の様子をこの目で見たいと思ったからだ。この地震のすさまじさを覚えておこうと思っていたからでもある。

ツアーの途中で実際の被災地を訪れることができた。私が訪問した地区は津波の被害が大きい地区だった。事前に津波が起きる前の写真を見ていた。津波の前はたくさんの建物があるきれいな街並みがあった。現在は何もなかった。所々、かつてその場所に存在していたと思える建物の鉄骨が残っているだけだった。官公庁の建物があった場所にまつわる話を聞いたら涙が出てきた。たくさんの花が手向けられた官公庁の建物の跡地で手を合わせた。

私が訪問した宮城県は、がれきが片付いているところが多かった。それでもがれきの後処理はまだ終わっていないと聞いた。徐々に復興が進んできているようにも感じた。現地の被災した校友の方々のお話を聞く機会も頂けた。震災の後、事業を続けていくのが難しく、何度も辞めようと思った等の生の声はテレビや新聞で報道される内容とは違うもののように思えた。

現地を訪問して思うことは、今回の地震の様子を忘れないことだと思った。

そしてこれから私にできる支援をしていこうと思った。また東北の地を訪れたり、寄付をしたりして、支援をしていこうと思った。